



鳥居清長《美南見十二候 七月 夜の送り》天明(1784)年頃 ホノルル美術館蔵

Topics

鳥居清長 江戸のヴィーナス誕生

浮世絵黄金期への道
郷土の芸術家

新年度に向けて

千葉市美術館は今から12年前の平成7(1995)年11月に開館しました。この4月から第13年度目に入ることになるわけです。人間にたとえれば小学生から中学生になろうという成長期にあたります。

美術館の展示の華ともいべき企画展は、我が国の美術と外国の美術、過去と近・現代とをとりまぜて、本年度も多彩なラインナップを用意しております。

江戸錦絵の華やぎを伝える「鳥居清長 - 江戸のヴィーナス誕生 - 」展、愛と夢をファンタジックに展開する「シャガール展」、近代ヨーロッパ絵画と挿絵本の美しさを楽しめる「都市のフランス 自然のイギリス」展、1970年代から80年代初頭にかけて日本で活躍した異色の二人「文承根・八木正展」、近代日本版画シリーズ展の第五回目「日本の版画 1941-1950」、千葉市の美術の祭典として定着した「第39回千葉市民美術展覧会」。いかがでしょうか。皆様のご期待に応えることが出来るでしょうか。それぞれ専門分野を異にする学芸員諸君が張り切って準備を進めているところです。お一人お一人のご興味はいろいろと分かれるかと思いますが、これらの特別企画の内のいずれかでご満足いただければ幸いです。

また、いわゆる所蔵作品展においても魅力に富む内容を工夫しております。展覧会の名称にはなお仮称のものもありますが、以下のような展観が予定されています。

「鳥居清長」展の予告編ともなる「浮世絵黄金期への道」展、千葉ゆかりの作品による「郷土の芸術家」展、近年ご寄贈をいただいた楠原コレクション、島コレクションによる「近代日本画展」、摘水軒記念文化振興財団等からの寄託品に当館所蔵品を加えた「若沖とその時代」展、「文承根・八木正展」の理解を助けるための「1970年代の美術」展、近年物故したアーティストたちの活動を回顧する「逝きし芸術



鳥居清長《美南見十二候 九月 いざよう月》
天明(1784)年頃 千葉市美術館蔵

家を偲んで」展、千葉市科学館の開館を祝う記念協賛展「星をさがして 宇宙とアートの意外な関係」、明治初期に発行された錦絵新聞の内、毎日新聞の前身『東京日日新聞』と読売新聞の前身『郵便報知新聞』の全作品を集めた「芳年・芳幾の錦絵新聞」展。これは現在寄託中の膨大な明治版画コレクション(リッケンコレクション)のおかげで実現するものです。

当館に所蔵、保管されている美術作品には、千葉市によって購入されたものばかりでなく、市民や市外の方々から寄贈、寄託された作品も数多く含まれています。それら個人や団体の皆様が寄せてくださるご厚意のおかげで、上記のように充実した内容の所蔵作品展が実現できるわけです。この場をお借りして厚い感謝の念を表させていただきます。

さて、本年度最初の企画展となる浮世絵師鳥居清長の回顧展は、おそらく世界で初めての本格的な清長展になるはずです。

鳥居清長(1752-1815)は、錦絵の表現技術を最高度に洗練して、理想美を追究した美人画家です。喜多川歌麿に先立って、天明年間(1780年代)を中心とした江戸の都市風俗を明るく、おおらかに表現しました。8頭身のすらりとした長身の人物像が、西洋画の遠近法を取り入れた現実的な背景の中に、群像をなして配置される健康的なその風俗描写は、欧米の浮世絵愛好家に溺愛され、数多くの清長作品が海外に流失してしまいました。今回、シカゴ、ボストン、ニューヨーク、ホノルルの4美術館から貴重な作品を里帰りさせていただき、空前の規模の清長展が開催されることになりましたことを、嬉しく、誇りに思っているところです。当館1館限りの特別展観ですので、どうぞお見逃しのないようにと、心からお勧め申し上げます。

本年度も相変わりませず千葉市美術館をお引き立て下さいますようお願い申し上げます。

[館長 小林 忠]



マルク・シャガール《軽業師》1943年 個人蔵
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2007

浮世絵 黄金期への道

浮世絵は、17世紀に江戸の地で生まれた風俗画の一流派である。その流れは、瞬く間に風俗画の世界をリードして大きな流れとなった。18,19世紀と続き、明治の末に一応の終焉を迎えるまで、およそ250年の間、無数といっていいほどの作品が制作された。そのひとつの頂点が清長・歌麿・写楽などを輩出した1780,90年代である。かつては、その時代を黄金期と呼んでいた。今では、あまり使われなくなったが、浮世絵史上、多くの魅力溢れる作品が誕生したことは、広く知られている。

千葉市美術館では、4月28日から6月10日まで、春季企画展「鳥居清長 江戸のヴィーナス誕生」を開催する。本展覧会は、それに先立ち、所蔵品に、寄託作品を加えて、清長に至る浮世絵の流れを一覧できるよう企画した。

肉筆画(肉筆浮世絵)

今日、浮世絵と言えば版画を思い浮かべる人が多いと思うが、元をたどれば17世紀の風俗画の中から誕生した絵画の一流派である。

したがって、当初は、版画ではない普通の絵画(肉筆画)を指して言ったことは確実である。17世紀の中ごろ、寛文(1761-73)期を中心に盛んに制作された、いわゆる寛文美人図は、浮世絵誕生の重要なきっかけとなった一群といってよい。最初に展示した掛軸がそれである。この時期の作品にはほとんど絵師の署名がない。

菱川師宣や杉村治兵衛が、版本や版画の版下絵を制作した後も、肉筆画は盛んに制作されていた。宮川長春率いる宮川派、川又常行・常正など、18世紀前半までは、版画類を描かない肉筆画専門の浮世絵師も活躍した。懐月堂安度もそのひとりであるが、安度の門弟は版画も制作している。

1765年に錦絵という多色摺版画が誕生した後は、浮世絵師は、版画で人気を得てから、徐々に肉筆画に重点を移していくことが普通になった。磯田湖龍齋・勝川春章・歌川豊春などはそういった人たちである。

絵入り版本

本といえば、印刷され製本されたものを思い浮かべる人が多いと思うが、江戸時代の本は、筆で写して製本したいわゆる写本と、木版(木版以外のものもあるが極少ない)で摺り製本した版本に大別される。量的には版本が多いのはいうまでもない。版本のなかで絵の入ったものが絵入り版本であり、その絵も、文字と同じように木版に彫られ、摺り師によって摺られた後に製本される。したがって、絵入り版本の絵も、版画である。

絵入り版本が急速に発展するのが17世紀である。版本用の絵(版下絵という)は、始めはいろいろな町絵師によって描かれていたと思われるが、次第に、浮世絵師が多く担当するようになる。17世紀

後期の江戸の絵入り版本の過半を担ったのが菱川師宣である。本の挿絵ではない、絵が主体の大人向けの絵本を初めて制作したのも師宣で、その絵本に堂々と自分の名を入れたのも師宣が最初である。

大量に出版するには、版本という手段しかなかった江戸時代において、浮世絵師はその下絵を担当することにより、急速に勢力を拡大したといえるであろう。

今回は、多色摺りの歴史に大きな影響を及ぼした『芥子園画伝』など中国の版本も含め、17世紀後期から18世紀前中期の絵入り版本を展示する。

浮世絵版画

17世紀後期、絵本の中から誕生したのが一枚絵(一枚摺りの版画)で、今でいう浮世絵版画(浮世絵といえば浮世絵版画を思い浮かべる人が多いと思う)である。菱川師宣は浮世絵版画の祖と言われることが多いが、今日残る師宣の版画の大半は、画帖や組物がばらばらになったものであり、最初から一枚売りを意図して作られたと思

われるものはほとんどない。師宣より少し若い杉村治兵衛や、鳥居派の祖、鳥居清信は、画帖や組物でない一枚絵をたくさん制作していることが確かめられている。17世紀後期から18世紀初期は、版本と一枚絵(版画)は、まだ未分化の状態にあったといえる。よい。

京・大坂(上方)でも、1700年代初めに、大森善清が、20種以上の画帖の絵本を刊行する。今日、それらの多くは、一枚一枚ばらばらに保存されていることが多い。今回展示した『よろひ桜』の6枚もそういう作品である。

上方では、版本から版画が独立するまで一世紀近い年月を要したが、江戸では、18世紀に入ると多くの一枚売りの版画が制作

される。版画は、はじめは筆で彩色されていた(丹絵・紅絵・漆絵などという)が、まもなく多色摺りとなる。初期の素朴な多色摺りを紅摺絵といい、そこから、鈴木春信らによって、本格的な多色摺りである錦絵が誕生する。

天明期の清長の時代はもうすぐである。

[学芸課長 浅野秀剛]

浮世絵 黄金期への道

2007年4月1日(日) 4月22日(日)

10:00 - 18:00(金曜日・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 4月2日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

*()内は団体30人以上の料金

* 同時開催「郷土の芸術家」展と共通料金

鳥居清長

T O R I I K I Y O N A G A

江戸のヴィーナス誕生

the Birth of Venus in Edo

三大揃物

清長の版画の代表作といえば、戦前から、清長の三大揃物という言い方がありました。《当世遊里美人合(とうせいゆうりびじんあわせ)》《風俗東之鑑(ふうぞくあづまのにしき)》《美南見十二候(みなみじゅうにこう)》の三種の大判のシリーズです。今回の清長展では、三大揃物をすべて出品できるようにと努力しましたが、残念ながら、いくつかはパネル展示となってしまいました。

三大揃物の図の合計は、48点にもなりますが、版元も不明で、謎の多いシリーズです。清長研究に不滅の業績を残した平野千恵子氏は、作画期について、それぞれ天明1-4(1781-84)年、天明3-4年、天明4年としていますが、明確な根拠を示していないので、絵のスタイルから推定したものでしょう。

しかし、1点1点ゆっくり考えながら見ていくと、2枚続の《当世遊里美人合 又江(なかず)》の右端に夏衣装の吉原の遊女と二人の禿が描かれていることに気づきます。吉原の高級遊女や禿の装いは独特なので、はっきりと区別がつけます。吉原は天明4年4月16日に火災にあって全焼し、遊女屋は、江戸の各所で仮営業(仮宅という)しま

すが、その一軒の中洲での様子を描いたものと推定できます。したがって、天明4年の制作ということが判ります。平野氏の推定も天明4年です。さすが、というべきでしょう。



《当世遊里美人合 又江》山口県立萩美術館・浦上記念館蔵

清長と歌麿の競争

清長の大判美人画のシリーズとしては、最も遅い作品が《十體(体)画風俗》です。寛政3(1791)年以降の錦絵に押される極め印があるので、それ以降の、寛政4-6年頃の制作と推定されるものです。10枚のセットを目指したことは明らかですが、現在5枚しか確認できません。5枚で打ち切ったと考えてよいでしょう。売れ行きが悪かったので打ち切ったと考えるのが自然でしょう。

丁度同じ頃、歌麿もよく似た題名の大首絵のシリーズを制作しています。《婦人相学十躰》です。「体」と「躰」はともに「體」の俗字なので、同じと考えてよいでしょう。歌麿の作品もなぜか5枚しか刊行されず、シリーズ名を《婦女人相十品》と変えているので、複雑な事情があったものと想像できます。

清長と歌麿のふたつのシリーズを比較すると、清長の作品は1-2点しか残っていませんが、歌麿の作品は、8-10点も確認できるので、「十体」競争は歌麿に軍配が上がったといえるでしょう。この競争に敗れたことが、清長の美人画引退の直接の契機になったのでは、と想像しています。

平野氏は「(この頃の)清長は彼等(歌麿・長喜・写楽)と覇を争うには我が画技既に老いたりと自ら悟りを開いたのであろう」と述べています。さすが、というべきでしょう。



《十體(体)画風俗 狎をひく娘》個人蔵



喜多川歌麿《婦人相学十躰》ボベンを吹く娘

新発見の清長の絵馬

清長の描いた絵馬は、昭和のはじめに平野氏が調査した時点では、3点確認されていました、そのうちの1点の王子権現社にあった絵馬は昭和20年に戦災で消失してしまいました。近年になって、新たに清長風の絵馬が出現し、その絵馬を発見し所有している恵俊彦さんが、『浮世絵芸術』で紹介したのが、1998年のことです。文化(1811)年に、現在の富山県のお寺に奉納されたものだそうで、曾我五郎と朝比奈の草摺曳(くさずりびき)を描いたものです。

左側にかろうじて、「鳥居」の字は判読できるのですが、その下は読めません。絵のスタイルは清長のもので、時代的にも清長の絵馬で全く問題がないと恵さんも私も思っていましたので、清長の絵馬として紹介しました。

今回、その絵馬を借用して展示するにあたり、恵さんから赤外線撮影をして欲しいとの依頼があったので、東京文化財研究所の城野さんに頼んで撮影していただきました。その結果、「鳥居清長筆(花押)」という文字がくっきりと浮かび上がりました。花押ももちろん清長のもので、『浮世絵芸術』に発表した当時、清長の作であることを疑問視する人もあったのですが、これでようやく面目をほどこしました。

[学芸課長 浅野秀剛]



《草摺曳》恵俊彦氏蔵



落款の赤外線写真

関連イベント

清長土曜寄席

両日18:00～19:00 / 7階展示室内にて

5月12日(土)【出演】橋家圓蔵、橋家富蔵

5月19日(土)【出演】古今亭菊之丞

*当日の展覧会チケットをお持ちのうえご入場ください。

*座布団席券のお申し込みは往復はがきにて(別項参照) 5月2日(水)〆切(当日消印有効)

*座布団定員100名

*座布団席予約がなくても鑑賞は可能ですが、立見でのご案内となります。

邦楽コンサート「常磐津の世界」

5月12日(土) / 14:00～15:00 / 11階講堂にて

【出演】常磐津初勢太夫・他

*お申し込みは往復はがきにて(別項参照) 5月2日(水)〆切(当日消印有効)

*定員150名

*入場無料/展覧会チケット(招待券不可)の半券をご提示ください。

パフォーマンスと解説「江戸の粹 - 人形浄瑠璃の世界」

6月2日(土) / 14:00～15:00 / 11階講堂にて

【出演】吉田玉女(文楽/人形遣)

【演目】「伊達娘恋緋鹿子(八百屋お七)」火の見櫓の段

*お申し込みは往復はがきにて(別項参照) 5月23日(水)〆切(当日消印有効)

*定員150名

*入場無料/展覧会チケット(招待券不可)の半券をご提示ください。

[申し込み方法]

往復はがきに、ご希望のイベント名(日時も)、氏名、住所、電話番号、参加人数(申込み1枚につき1イベント、2名まで)を明記の上、〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 清長イベント係までお送りください。申し込み多数の場合は抽選。小・中学生は観覧無料につき入場券は不要ですが、座席の予約には、申し込みが必要です。

特別講演会「鳥居派の仕事」

5月19日(土) / 14:00～15:30 / 11階講堂にて / 入場無料 / 先着150名

【講師】鳥居清光(画家、鳥居派九代目)

学芸員による清長日曜講座

両日とも14:00～15:30 / 11階講堂にて / 入場無料 / 先着150名

5月6日(日)「鳥居派当主として - 清長役者絵の世界」

5月13日(日)「江戸のヴィーナス - 清長美人の誕生」

学芸員によるスライドレクチャー

会期中毎週金曜日 / 14:00～15:00 / 9階講座室にて / 入場無料

美術館ボランティアによるギャラリートーク

毎週水曜日 / 14:00より

*チケットをお持ちのうえ、8階展示室入口にお集りください。

鳥居清長 - 江戸のヴィーナス誕生 -

2007年4月28日(土) 6月10日(日)

10:00 - 18:00(金曜日・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 5月7日(月), 5月21日(月), 6月4日(月)

[観覧料] 一般 100(800)円

高校・大学生 70(560)円

小・中学生 無料

*()内は団体30人以上の料金

郷土の芸術家

郷土の芸術家たちは、多士済々である。絵画、彫刻、版画、書、工芸の各分野にわたる。

さて、「千葉(あるいは房総)に生まれ、千葉に育ち…」と云った表現をよく使うが、芸術家たちは千葉という土地に暮しているからといって、土地の恵みだけで芸術家になったわけではない。

たとえば、画文集『白描戯画』(1956年)などで知られる遠藤健郎氏の場合、戦後の日本の画壇に対して「どうして戦後の日本の画壇には、この敗戦の痕跡が現れなかったのか、戦後のリアリズム、この悔恨のリアリズムはどうして現れなかったのか(「我が生涯の……来し方ゆく末」より)」という疑念を抱き、鳥獣戯画などの日本の過去、19世紀初頭のごや、第一次世界大戦後のドイツを描いたケーテ・コルヴィッツ、オットー・ディックス、ゲオルゲ・グロックスたちの作品に自らの指針を求めている。これは、どんな画家であっても、彼が生まれる背景には、古今東西の膨大な芸術の記憶が背後に控えていることを物語っている。書にしても同じ事が云える。大体、漢字というものは太古の中国大陸に由来するではないか。芸術家たちは、自らが悠久なる大河の、河口のほんの砂粒程度の存在であることを常に意識していなければ、過去に押しつぶされてしまう。

私たちは、地元ゆかりの芸術家たちの作品を鑑賞する時、ついつい郷土における活動や貢献、といったことのみを語りがちである。

筆者のような展覧会を組み立てる側としても、その方が馴染み易いため、その傾向に流されてしまう。自戒を込めて思うのであるが、むしろ郷土ゆかりの芸術家たちこそ、古今東西の芸術の記憶の中で見直すべきだろう。優れた芸術家は、お国自慢の中に安住しない。

話題を転じてみよう。

千葉という土地は、芸術家たちにとってはたまに訪れて題材を探したり、気分転換を図るには良い土地である。しかし、東京に隣接しているために、中央での評価は直ぐに伝わる。一昔前、もっと東京から離れた土地に住んでいたならば、東京で個展を開催しただけで「中央で高い評価を得た」という吹聴も出来ただろうが、千葉では以前からそんなことは望めなかった。化けの皮が直ぐ剥がされる土地なのである。今、ふと椿貞雄氏や東山魁夷氏のことが思い浮かんだが、御二人も県内に在住していたことを思えば、後進の芸術家たちはよほど覚悟が要求されるのだろう。

このように考えると、千葉は、芸術家が安閑と暮らすことのできない土地であるし、今回の展覧会の出品者たちは、いずれもそんな日々の精進に耐えた芸術家ばかりである。

[学芸員 藁科英也]



浅見喜舟《眠雲聴泉》昭和51(1976)年



椿貞雄《風景》昭和27(1952)年



土肥刀泉《琅瓷釉彩花瓶》昭和49(1974)年

郷土の芸術家

2007年4月1日(日) 4月22日(日)

10:00 - 18:00(金曜日・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 4月2日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

* 同時開催「浮世絵 黄金期への道」展と共通料金

「夢二式美人」にうっとり

アンティーク着物によるファッションショー 「夢 コレ」開催

今年はじめの展覧会「竹久夢二展 - 描くことが生きること -」の関連イベントとして、2月10日(土)にファッションショー「夢 コレ」が開催されました。これは夢二が一世を風靡した大正期から昭和初期の着こなしをショー形式でご覧いただくもので、コーディネートはアンティーク着物に造詣の深い大野らふさん、モデルは多数の応募者のなかから選ばれた11名。大野さんの解説にあわせ、クールな音楽に乗ってウォーキングする彼女たちのモデル振りは、素人とは思えない堂々たるものでした。2回のショーはいずれも定員をはるかに超える大盛況となり、着物と帯との奇抜な組み合わせや夢二の絵から抜けてたような艶姿に、会場のあちこちからため息が。また昨今のアンティーク着物ブームを映して客席にも着物姿がちらほらと見え、実に華やかな空間となりました。お客様たちはショーの後展示室へと流れ、まぶたに残る数々の衣裳と夢二の描く女絵とを較べて楽しまれたようでした。アートとの向き合い方はさまざまだと、改めて思わせる一日でした。



ボランティア日和 episode12



会議では活動内容等が話し合われます

3月に放送されたNHKスペシャル「歌麿・紫の謎」をご覧になりましたか？ アメリカのポストン美術館に秘蔵されていた約400枚の喜多川歌麿の作品に関する調査・研究の成果を紹介した番組です。

大富豪だったというコレクターは、「展示しない」ことを条件として、6500枚もの浮世絵を美術館に寄贈したそうです。一度も公開されることなく保存されていたために変色や退色を免れた作品のみずみずしい美しさや超絶的な技巧が、高精細デジタル画像によって映し出される様子は圧巻でした。また歌麿の作品に実は紫が多用されていたこと、さらに厳しい幕府の取締りに対する強い反骨精神や「紫」にこめられた思いなど、これまで知られることのなかつ

た歌麿の一面の紹介に、息を飲むようにして番組に見入ってしまいました。

私たちボランティアは、開催される展覧会ごとに勉強をして、ギャラリートークや鑑賞教育のお手伝い等を行います。それまで浮世絵など見たこともなかった私も、活動が続けるうちに少しずつ浮世絵に関する勉強をするようになりましたが、あまりにも有名な歌麿については、なんとなく知っているつもりになっていました。今回のような番組を見ると、浮世絵の世界の奥の深さに改めて驚かされます。

今年度、千葉市美術館では、歌麿とともに浮世絵美人画の絶頂期を形成した鳥居清長の大規模な展覧会を、ゴールデンウィークから6月初めにかけて行います。またそれに先駆けて、清長誕生までの浮世絵の流れをたどる所蔵作品展「浮世絵黄金期への道」を開催しています。私たちボランティアも、その2つの展覧会を目指して、2月初旬から勉強を始めました。活動を始めて5年目に入りますが、清長や清長以前の浮世絵に関する展覧会はほとんど経験していないので、初めて知ることがたくさんあります。新しいことを学ぶたびに浮世絵の面白さを発見するのように感じますが、その面白さや楽しさを、会場のお客様と一緒に味わえたらと、そう願いながら勉強を続ける毎日です。

[美術館ボランティア 持丸真弓]

あなたのグループも美術館で展覧会を開きませんか 「千葉市美術館市民ギャラリー」平成19年度下半期 利用者の募集



千葉市美術館市民ギャラリー(9階)は、美術に関連するグループに作品を発表していただくためのスペースです。美術サークル、美術団体、美術学校、カルチャースクール、学校の美術部、子供絵画教室など多種多様なグループが、絵画、彫刻、書、工芸、写真、デザイン、手芸などの展覧会を毎年多数開催しています。

ギャラリーは、約160㎡の広さを持つ3つの区画ごとに貸出し可能ですが、3つあるいは2つの区画をひとつにつなげた広大な空間で大規模な展覧会を行うこともできます。(左の写真)面積あたりの利用料が、民間の貸ギャラリーより割安となっていることも魅力です。

	床面積	壁面長	1日の利用料
市民ギャラリー 1	162 ㎡	約 49 ~ 67m	9,170 円
市民ギャラリー 2	137 ㎡	約 36 ~ 54m	9,170 円
市民ギャラリー 3	162 ㎡	約 49 ~ 67m	9,170 円

*天井高は各ギャラリーとも2.9mです。各ギャラリーには控室が付きます。

【利用期間】

火曜日から日曜日までの6日間単位とします。(延長はできません)
*ご希望により月曜日も13:00より開室することができます。(第1月曜日を除く)
*年末年始(12月29日~1月3日)は閉室いたします。

【開室時間】

10:00~18:00(金曜日と土曜日は20:00まで)

【利用条件】

千葉市内および近郊で活動する美術関連のグループが行う展覧会。
*個展および二人展は開催できません。また生け花展も不可です。

現在、平成19年度下半期(平成19年10月1日から平成20年1月20日まで)の利用者を募集中です。上記の期間に市民ギャラリーの利用をご希望の方は、市美術館10階事務室に「市民ギャラリー使用仮申請書」を提出して下さい。(仮申請書の書式は、10階事務室でお配りしております。)なお仮申請書の提出締切日は、平成19年6月30日です。

仮申請書の希望期間(第1希望から第3希望まで記入可)が重なった場合、調整・抽選のうえ利用者を決定し、7月末までに内定の通知を郵送いたします。

お問い合わせ 千葉市美術館 043-221-2311

コンサート、講演会、美術講座、会議向けのスペースもあります 「さや堂ホール」、「講堂」、「講座室」の貸出しも随時受付

美術館開館日で、美術館や千葉市のイベントで使用されていないとき、さや堂ホール(1階)・講堂(11階)・講座室(9階)を有料でご利用可能です。さや堂ホールはコンサートやイベントなど、講堂は講演会や会議など、講座室はデッサン会や美術講座など、美術・文化関係のイベントにお使いいただけます。利用しようとする日の6カ月前の月の1日から予約が可能です。



1F さや堂ホール

【利用料金】

	10:00~13:00	13:30~17:00	17:30~21:00
さや堂ホール	6,420 円	7,490 円	7,490 円
講堂	3,360 円	3,920 円	3,920 円
講座室	1,520 円	1,770 円	1,770 円

【利用の手続】

1. 直接ご来館いただき、受付で空室を確認後に予約できます。「使用許可申請書」に必要事項を記入いただき、使用料納付後に「使用許可書」を発行します。
2. 電話で予約する場合、予約が可能かどうかをご確認のうえ、可能であれば仮予約いただき、予約した日から1週間以内に直接ご来館して「使用許可申請書」をご提出下さい。

お問い合わせ 千葉市美術館 043-221-2311



【編集・発行】千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

http://www.ccma-net.jp

【発行日】2007年4月13日

【印刷】半七写真印刷工業株式会社

交通案内

- JR千葉駅東口より徒歩約15分
- ・千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ・バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚IC下車国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く
- 地下に駐車場があります

